

親鸞の
詩^{うた}が
聞こえる
エッセンス・正信偈

戸次公正
Becki Koshu

親鸞の詩が聞こえる

—エッセンス・正信偈—

はじめに

一冊の絵本に誘われて「正信偈」のエッセンスにふれてみたい——。そんな想いから私の心の旅は始まりました。

「正信偈—正信念仏偈—」は、親鸞（一一七三—一二六二）によって作られた仏教讃歌です。それは「真実の心 なむあみだぶつの歴史の詩」です。

「正信偈」は親鸞の代表的な著作『教行信証』（全六巻）の二巻目「行巻」のおわりに添えられており、その内容は大きく二つに分かれます。

前半は、真実の教え『仏説無量寿経』にある仏の願いが説かれています。そして後半には、その願いを受け継ぎ伝えてきたインド・中国・日本の七人の高僧たちの歩みと教えがうたわれています。

仏の願いとは「あらゆるいのちあるもの（衆生）と共に生きたい」

「戦争や差別や貧困によって人間であることを奪われることのない世界（浄土）を明らかにしたい」という法蔵菩薩の解放への祈りです。

その心は「南無阿弥陀仏」という真実の名と言葉（念仏）となり、

アジアの大地を風にのり、海をわたり伝承されてきました。

心の旅は、古今東西のアート、文芸作品などにみちびかれて「正信偈」の森や山、河を訪ねていきます。

「正信偈」の原文や意識を口ずさんでみると、あなたの中から親鸞の詩が聞えてくるでしょう。

戸次公正

目次

はじめに

2

信じること

9

流罪八〇〇年

12

寿と光

15

ひとしづくの心

18

国を棄て国を建てる

21

願いは光となる

24

名となる

27

誰かをいじめてはいないか

30

雲や霧におおわれても

33

風と光の人 イサム・ノグチ

36

流罪八〇〇年、それから…

40

ユパンキ「夜の祈り」を聴きながら

43

カレーとラーメンと念仏	47
法然との出あいとは	50
『じごくのそうべえ』——その源流をたずねて——	54
人間が人間に見えますか？	58
死刑について	62
絵解きの世界へ	66
チベット人への宗教弾圧と私たち	70
往く道と還る道——『千と千尋の神隠し』を観ながら——	74
伝統と断絶——靖国問題——	78
旅人ふたり	82
おかえりなさい——『おじいさんの手』という本——	86
からっぽの世界	90
絵のない絵本と字のない絵本	94
ダライ・ラマに会って見た夢	97

猫に会い、犬と別れる	100
タテとヨコ	104
越える・超える	108
酒と煙草と憲法九条	112
極楽に住む鳥	116
救いの海	120
『おくりびと』からの問いかけ	124
阿修羅の琴	128
お経・「正信偈」を日本語で	132
五劫のすりきれ	136
十二の光	140
大逆事件の闇と光	144
おぼえていますか	148
梟の説法	151

本物のような「ゲルニカ」	155
からすになった男―太宰治と「正信偈」	159
自殺者を責めないで	163
紙芝居をやりながら―同朋・脳死／臓器移植・裁判員制度を考える―	167
死ぬのがこわい	171
『スター・ウォーズ』に信を観る	175
禁じられた歌―「正信偈」はなぜ作られたのか?―	179
ふたつの『アリス』―もうひとつの「正信偈」	183
「正信偈（正信念仏偈）」	188
「念仏」	218

凡例

一、本書は、月刊『同朋』誌（東本願寺出版部）で二〇〇七年一月号から二〇一〇年十二月号まで連載された戸次公正氏の「べっきさん」のエッセンス「正信偈」をまとめたものです。

一、「正信偈」の原文・読み方・振り仮名は『真宗聖典』（東本願寺出版部）に依り、意識（「真実の心 なむあみだぶつの歴史の詩」）は著者によるものです。

一、文中の敬称は略しています。

信じること

吹雪の舞う山を、ヤギとオオカミが身を寄せ合いながら昇^{のぼ}っている。二匹がお互いを心から信じ合えるようになるまでに、どれほどのためらいや躓^{つまず}きがあったことだろう。その時間^{とき}を経て、今ともに一つの道を往^ゆこうとしている。絵本『あらしのよるに』のラストシーンが近づく。

二人^{ふたり}、いや二匹^{にひき}の出遇^{であ}いは偶然^{ぐうぜん}だった。嵐の夜に飛び込んだ山小屋の、真つ暗闇の中で互いの姿をそれと知らぬまま話をし、意気投合する。翌日、「あらしのよるに」を合言葉に同じ場所で再会した時、びつくり仰天^{ぎやうてん}した。なんとオオカミのガブとヤギのメイ。まさに食う者と食われる者。それでも友情を抱き、相手を信じて付き合い始める。やがて周囲^{まわり}からは不信の眼にさらされ、非難の声もあがる。ふたつのいのちを引き裂こうとして……。

この物語のテーマは「生きていく上で大事なことは何か？」という問いかけだ、と作者は言う。こんな解釈もある。「ガブとメイは、国であり、民族であり、宗

教であり、恋愛であり、本来この地球上に生を受けたあらゆるものの姿である」

(宮本亜門・演出家)

二匹をつなぐのは、ただ一つ。信じること。でも一番難しいこと。

信じることの大切さ、厳しさを、悲しいほど透明に力強く語った人が、今から八百年前にもいた。その人の名は親鸞。

少年時代から二十九歳までを、比叡山の鬱葱とした中で生き抜いた。彼が山をおりて出会った人が法然。生涯の師となったその人は言った。

「ただ、南無阿弥陀仏と声に出し、その言葉にこめられた願いを信じて生きるのです」

親鸞は、そのひと言に光を見出し、このことひとつを信じ、受け継いでいこうとした。

その心をオマージュ（ほめたたえる辞）の詩にしたのが「しょうしんげ（正信偈）」という作品である。

その詩は漢文で書かれ、六十行・百二十句から成る。最後の一句はこう結ばれ

ている。

「ただ、信じること。真実の言葉を伝えてきた人々の願いを、ひたすらに、一人から」

〔原文〕 唯可信斯高僧説

〔読み方〕 ただこの高僧の説を信ずべし

言葉は声になり、風にのって運ばれる。遠い彼方からの問いかけが、眩きの中からふと立ち現れる。吹雪はもうやんだ。雪の間からのぞく光のぬくもりは、一時、風の冷たさを忘れさせる。

【参考にした本など】

絵本『あらしのよるに』シリーズ全7巻 きむらゆういち作、あべ弘士絵（講談社）
アニメ映画・DVD『あらしのよるに』杉井ギサブロー監督（東宝）

流罪八〇〇年

夜明け前、黙の中で馬頭琴が聞こえる。二本の弦の棹の先に馬の頭が彫刻された楽器の響きには、哀切と郷愁が入りまじる。それは遠い過去へと想いをはこばせる。

時は一二〇七〈承元元〉年、二月九日。

賀茂川の辺で一人の僧が処刑されようとしている。彼の名は安楽。住蓮と共に、帝に仕える女性を出家させた嫌疑で囚われていた。

安楽らの師は法然。師は語る。「争いや差別のなく、を願った仏を信じて、唯念仏と称えよう。誰もが平等に救われる」

その言葉は暗闇に掲げられた炬となり、あらゆる人々の間に念仏が広まった。親鸞もその弟子の一人である。

しかし、当時の仏教界は法然の教えを危険視し、禁止せよとの声をあげていた。やがて醜聞が捏造され、風の噂によって安楽と住蓮が捕えられた。

今朝、安楽は牢ろうから御所ごしょに連行され、後鳥羽上皇ごとばじょうこうの前に坐すわらされた。安楽は臆おくすることなく偈文げもん（教えの詩句）を朗唱ろうしょうした。それは「念仏する者に怒いかりを抱き、怨うらみをつのらせるような、真実を見ることができな者は、長く苦海くかいに沈み救われることがない」という文もん。

安楽は六条河原ろくじょうがわらへ引き出され、群衆が見守る中、静かに念仏を称えて、首を斬きられた。住蓮もその日のうちに。

弾圧の嵐は法然や親鸞にも吹き荒れ、師と弟子はやがて京都を追われ流罪となつた。親鸞は自らの著書にこの事件を記録し、天皇と臣下しんかを告発した。だが決して怨念おんねんを抱き続けたのではない。念仏の真実が記憶の闇やみから甦よみがえり、うたい継つがれていくようにと讃歌さんかをそえたのだ。それが「正信偈」である。

馬頭琴にも悲しい物語が伝わる。モンゴルの草原に貧しい羊飼いの少年スーホがいた。彼は白い馬を育てあげたが、殿様とのさまに力づくで奪とわれる。でも白馬は傷だらけになりながらスーホのもとへ逃げ帰かえって息絶いきたえる。痛み悲しむスーホの夢に白馬が現れて告げる。

「私の骨や皮や筋や毛で楽器を作ってください。何時までもあなたの側にいられるから」


こうして馬頭琴が生まれた。その音色が今、「正信偈」の声にかぶさってくる。二〇〇七年は、念仏に生きた師が友が、流罪・死罪になって八〇〇年目にあたる。

【参考にした本など】

絵本『スーホの白い馬』大塚勇三再話、赤羽末吉画（福音館書店）

CD『美麗の大草原／イラナ（馬頭琴）』（コロムビアCOCOC083935）

流罪の記録は、『教行信証』化身土巻「後序」・『真宗聖典』398頁（東本願寺出版部）



寿いのちひかりと光

きみよーむりよーじゅによらい……

風の彼方から「正信偈」が聞こえてくる。耳を澄ませば、その声は遠い祖先おやたちの里からの便りとなって胸に届く。

「正信偈」の冒頭には、「無量むりょうじゅ寿」と「不可思議ふかしぎこう光」という語が出てくる。量はかり知れない寿いのちと不可思議の光。

寿は命・生命であり、その長さつまり時間のこと。寿はまた限りなくはたらくみほとけ仏の清らかな慈愛と大きな悲しみをあらわす。光は明るさと輝きであり、その広さつまり空間のこと。光はまた思いはかることのできない仏の願いと人間の虚きよ偽を見抜く眼差し。

風と寿と光……。そこからふとアニメーション映画『風の谷のナウシカ』が浮かんだ。

それは人類が自然を征服し繁栄を極めた末に大戦争で崩壊してから一千年後の